



宮田南北子編次

近世新話

雲乃晝間

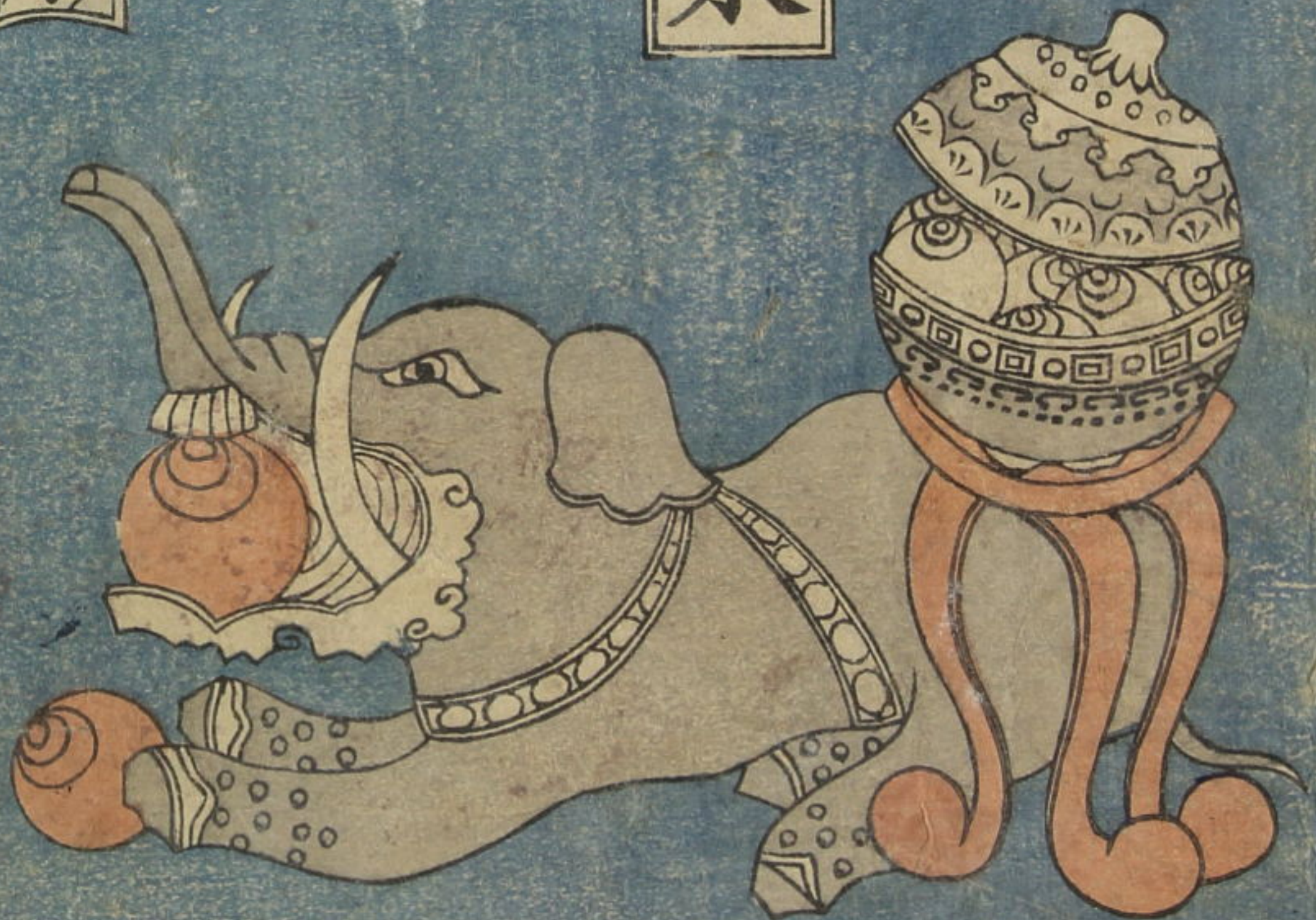
雙玉傳第貳集

刊行精美

全冊伍本

歌川國直子畫図

岡田羣玉堂精彫



大幸

全四
定

長喜
門

雙玉傳

馬のしん梅本あはれ

昔玉傳のしん梅のあはれ

あはれ

あはれ

あはれ

あはれ

七月四日



貞節栢舟詩

雙玉傳



近世新話 雲晴間雙玉傳第二輯惣目録

卷之一

十一回 伏白及忠邦託忠孝
十二回 福原古都輝五郎失劍

卷之二

十三回 西宮浦行龍逢好母子
十四回 上青樓行龍逢七草女

卷之三

十五回 盡孤真宇雅究進退
十六回 鬧柵花蛟倉闖駭兵

卷之四

十七回 隔獄舍兩賊演述懷
十八回 鬧法場兩龍救兩賊

卷之五

十九回 賊子害痴奸名刀歸旧主
廿回 孝子鞠明玉視白面觀音

通計十回

每輯五卷

近世新話 雲晴間雙玉傳第二輯卷之一

播陽

宮田南北作

第十一回

伏白及忠邦忠孝託

勇々相溢勢々相満危々相のどじ。鬪曾古太平二助盛が愛娘冥
姫ハ艶美あり姿小引替赤松家小窺寄名玉と棄ひ取んと勅
使と偽り入こみし小忽小緯頭れ名玉ハ既小得くれり太勢
小取圍も一身多勢と防ふようあ。今危く見へる所小一手
の勇兵十名をうへ。巽さまと救と呼り。群る夥兵を四方へ遣
詰血路と開けく来る者あり。巽姫ハ扁舟より此ありさまを見

又三傳二編卷之二

うより。心の内よりうらむびつゝも。もく。吾と助る。何人かや
 と瞳と定め。遂に見る。真先に進ん。る。鯨江。濡九郎元。其外
 釣。根権太と。属下の者共あり。れば。巽への。か
 と得て。徐達。吾。主と思ひ。よくあそ敵と。改。よ
 ろ。こ。む。も。つ。の。ゆ。入。礼。ハ。一。々の。ぐ。も。も。や。く。此。場。と。切。抜
 て。目。出。く。一。衆。會。か。す。べ。し。と。語。る。れ。も。巽。姫。ハ。些。も。油。断。あ
 ら。む。こ。も。ま。守。く。飛。來。る。乱。箭。と。刀。の。く。受。流。し。切。拂。ひ。辛。ふ
 し。と。三十。余。町。水。の。早。瀬。ふ。ま。う。せ。は。く。逃。く。く。あ。く。落。の。ひ。ま。う。
 此。時。鯨。江。一。手。の。者。共。悉。く。討。取。ら。れ。命。全。き。者。と。て。の。濡。九
 郎。一。名。の。も。と。れ。す。く。身。の。數。ヶ。所。の。手。と。負。ひ。喘。々。追。う。け。來。

血。み。滌。く。る。刀。と。杖。不。突。や。堰。給。う。あ。姫。さ。ま。よ。今。の。追。來。る。敵
 も。あ。く。待。せ。る。く。と。打。ま。ひ。け。ん。巽。ハ。早。く。も。心得。て。舟。と。小。葎。へ
 漕。寄。く。濡。九。郎。と。扶。け。の。せ。扱。有。し。一。等。一。什。と。遺。も。あ。く。説。閑
 され。ば。濡。九。郎。ハ。閔。緯。ふ。感。嘆。と。る。夏。大。く。と。あ。ず。且。や。や。う。八。君
 あり。是。より。何。所。へ。と。心。ざ。し。て。や。行。往。ま。ふ。と。問。ハ。巽。ハ。点。頭。し。
 吾。濟。ハ。是。より。東。路。へ。趣。く。べ。し。元。より。大。ある。望。あ。れ。ハ。通。英
 雄。の。士。と。う。こ。ら。ひ。女。あ。ぐ。く。も。魁。主。と。あり。當。国。あり。天。神。山
 小。取。籠。り。旗。と。山。塞。ふ。あ。び。う。す。べ。し。豫。て。の。ど。み。一。名。玉。と。得。て
 う。上。へ。神。通。心。の。ま。く。ふ。し。て。恐。と。思。ふ。者。ハ。あ。く。徐。ハ。這。里。よ
 り。西。海。ふ。趣。き。金。銀。と。集。り。よ。う。く。吾。濟。ハ。播。磨。ふ。旗。と。奉。緯。と

起せしと閑あし速不馳來を即ち一方の將とせん。いざや是
より立分れん吾まゝ少く乳の下み刀疵を負うれども。名
玉とのく撫ふも痛も止疵口も頓跡あり治る。是
名玉の奇端ありし猶遺りあり。后更と談じ。やうて船より飛
上り口ふ咒文と唱ふれば。姿は暮春の雪に下り跡あり消る失
みくろ濡九却のやよ待給へ云更ありし声のわねど。巽が姿も
たわくも消て蔭ぐも見へざれば。心中まじく其奇と感じ。惆
然として跡打見やう。暫く立も得去さる。斯て果し
と身と轉し。何くあゝ途のあり浪う末浪の餘江の水り
浴ろく舟と行く。西国のうへ趣きく。此時三木の城中あり

賊婦既不船路より。逃失しと閑より。今も追とて其甲斐ありし
し。やうく野兵どもと召集め。再び四方ふ人と遣し。賊の來歴を問
し。わらる。就中司它次郎の心得ぐきものありしと。巽姫と諸
ものに。画圖やうて八方に觸流し。早速捕へ來るものあり。數多し
褒賞と賜んとて。詮鑿尤嚴く。恠る所へ京師より。眞の勅使平石
中納言治長卿。播磨表へ下向あり。長則朝臣。斯と閑より。心の
丹患らせられ。自大勢と卒して。出迎ひ給へ。治長卿へ會款し
つ。畢声尤嚴あり。正堂へ入る。威儀温順あり。武守守り
の堂上優美あり。儉々として徳と勇。おき。始の賊婦不似す
並居る人々思へす。あゝ頭をさげく。平伏す。平石中納言治

又三傳三編三十一

長卿静不衣紋の袖如をあらせ。這回當国天神山と致しつる所て
 希代の名玉と得しつるいとゞ夏。悲しくも睿問み達し。天子は問
 へし。あつらん。睿慮あり。速し玉と捧よ。九とくく。執奏まぶしと麗
 ふ。さうりれ。長則とつて頭ときげ。悠り上るへ。最恐きとゞあつる。
 名玉の義の謬て。紛失しつる。今ふおひて行及知もむ。日夜ふ詮義
 仕り。日あくふ献し。願ふ。御勅使さむの大悲の賢慮と御
 うけ下され。朝庭より。執行給つる。悦び是ふあく夏あり。
 まづこの御菓子料ありと。一錠の黄金と恭しく奉る。中納言
 治長卿寛尔と笑て宜ふやうへ。這回至尊の睿慮ふありし。名
 玉紛失あつる。其儘そへ相濟ぐ。然れど國王は

勞と察し。暫時の猶豫いし。相議せし。言へ
 う云のこす。心へ深き公家の挨拶。青侍が案内打連が。奥
 亭へ入せし。長則朝臣へ。黙然と。指打あへ。居あひし。名玉と
 失ひし。予が一世の謬く。成と以て。せむん。我家の立行が。夏
 りやあらん。你達此義と心得て。準備と。ねと宜ふと。蒲上大學
 頭ときげ。この恐へ。君の御説。是式の夏ふ。君の自ら
 成し。夏や。ある。某の思案あり。君這難と避んとあつる。
 名玉と預し。者不罪と負せ。玉と失ひし。と名として。誅を加是
 と以て。朝庭へ。一年の日限延と願ひ。心肅静不玉の有為と。詮義
 あきし。あつる。どあつる。や。知さる。夏あつると。佞刻邪智成

廻らして、辨巧へんぎょうに演の上る。是これ蒲上かみかみが刻えん計けいみる。十郎じゅうらう不せつ腹はらさる。其その妻つまの袖そで篠のが美うあるとり。己おのが妾めかけとせんユミ多おほく。長あひ則のり朝あさ臣しんら
是これと聞頭かぶと右りたりふ掉おちりやらよ人ひとの君きみとして。其その身みの罪つみ
と他人ひと不おご譲やり。罪つみあを臣しん下くだふ腹はら切きすと。予よさらしに快よろことせず。
再またよらしき計けい議ぎとかし。全まき計けいとあして。緯いと總おん便べん不しす
べし。一いつ朝あさ偽いつはり勅しやく使し不あや欺あれ得えぐとき玉たまと失ひしん予よが過あやり。誰たれと
罪つみ何なんちの罰ばつせん。決きと人と罪せずと。語ことばと放つし宜よろまれる浦
上かみ今いまの言ことばあく。既すで不し退ひ出でんとする所ところ不し忽たちち一人殿との前まへ不お推お泰んし。
臣しん元もとより玉たまと預り。誤あやつし賊あや手て不あ渡わたせり。其その罪つみ成なりとめて報かり
むん何なんふとらら賞しょう罰ばつと行んゆらせまへと而脱だつ腕うで刀やと拔て

吾われ腹はら一ひと文字もじ不あ撞つ貫くき。どううや座ざして吐く息いきの苦く痛いた。諸しよ衆しゆ人ひと
是これつと駭おどきつ。下くだりし見みまる名な古この十じゅう郎らう忠ちゆう国こくあり。長あひ則のり朝あさ臣しんの
大おほいふ駭おどきと。何なん故ゆふや十じゅう郎らう忠ちゆう邦ほう。ようあま玉たまと失ひしとして。
你なんぢと罪とらる我あらず。と辨へむと云あらる下知しとも待まちぐ吾
前まへらし。切せつ服ふくせしんの故ゆ。語ことばあらしと囑せままる。十じゅう郎らう苦く痛いた
の息いきと續。まる惶おそろし入いる君の御ご説せつ。尊そん命めいとも待まちぐと。切せつ腹はらせし
ハ十じゅう郎らう君きみと蔑すらふ似れども。御ご説せつと待バ御ゆらの頓とん不ふ
魚うと計りまる。猥の切せつ腹はらゆらせまる先程ほどゆらも蒲上かみかみ氏し
の言ことばと密に聞待まちりし。其その理こと不あ合あへり。其その今いま切せつ服ふくせし。朝あさ庭てい
への勿な論ろん。将しょう軍ぐん家かへも言ことば記き立た。且かつ君きみ家かの御ご辱じやく也なり。此こ身み不あ引ひ受うて思おもひ

ひきひや〜此切腹我身あづ〜ん其跡で解小太郎忠孝ふ仰て
玉の行衛とぞ詮義をかき〜りあはるべし。草黄泉より小太郎が陰身
ふ添ふ名玉の有為と詮鑿りて守べし。ゆりさせま〜是迄なりと
刀とやあ〜引廻とも。若痛と察して長則朝臣。扇子とひ〜き
顔ふあ〜。涙と包む心の秘名。か〜る所へ十郎が妻の袖篠駭き嘆
き。小太郎共侶倒つ轉びつ走り来り。こ〜浅ま〜や十郎休祿
何誤の有〜故。か〜くハ生害せ〜れ〜やと。ま〜ぐり嘆々バ小太郎
も先考の後ろふ立ま〜る〜。引廻と手と楚と抱〜れ〜。こ〜何故
の卿生害。早誤あ〜ひ〜義ふあ〜やと。堰込々々問か〜も〜ん。
ト郎眼と見開ひ〜。やよ慮外〜無礼あ〜ずや。恐〜も君前成

そ。吾何〜一早誤へき。切腹ハ豫ての覚語。大切あ〜名玉と。失ひ〜
一世の誤り。身と殺〜て主家へ言訳。或〜と何と悲〜むべきや。やあ
れ小太郎忠孝よ。吾ふ代〜頼とあ〜る〜。玉の有為と詮義せよ。
不忠不臣と禁て。父の家名と下とあ〜よ。云遺緯ハ是の〜あり。
さ〜〜と忠臣義士。噴貫〜五臟六腑。白刃と抜が此世のい
ま。あ〜あ〜息ハ絶て行。袖篠小太郎左右より。父の友猶ふ
取す〜。声と放〜。慟嘆悲哭並居る人々是と見て。共ふ袖と
ぞ濡〜。時ふ一間の襖とひ〜。中納言治長卿。實然と
立出給ひ。通忠臣十郎〜や。那〜切腹〜。見届〜。忠臣
義信の心ふ愛て朝庭より〜。執奏あ〜。玉の行衛知る。逆日限

又三傳二編...

十師の
口より
の出て
解之中
小か
是其
竜崇
あつて
像と
知せし



延引つゝ守べしと宜言ふ長則朝臣並居る諸臣一同ふ有
 難しとぞやと。勅使ハヤク座とてちあがり。早還御と
 と知せの件。長則朝臣も膝行して見送りまふ。礼讓威儀
 治長卿ハ會釈し。輿ハ打のりまひ。胸勢引つ。播磨路と
 小見あしと出行ま。空ハ都の春錦。行列美々しく帰られ
 くる。長則朝臣ハ十部が忠義ハ成せしと嘆うせまひ。予誤て
 誤て。昔春秋の時臨潼の會あり。楚國ハ以て室とするとの
 あ。只善只徳室とす。伍子胥ガ云し。言の葉と。思ひ出せば
 つと厭ふ耻べき上も辱べき。緯之瓦石ハ等し。無用の一番と。
 愛せし由み愛しとも。猶愛すべき忠臣と。倉卒ハ失ひし。誤り

是より大ハありま。無慙の責とて。うらと嘆息悲衷ふ。せ
 むせまひ。即時ハ名古小太師と父の家督と定られ。近習ハ取
 ろへ。小太師とつと頭とさげ。先考忠邦ガ末期の言ふ。汝ハ是
 より暫く君の休祿と賜り。我ハ假替て。細と廻り。玉の有為
 とねげ。よりや。云遺し。いりくる。舞ハ今ハ小可ガ肝胆ハ撤骨し
 て。此志と果さず。父亡靈へ云訣あり。はぐらん君の大慈と以て。
 霎時の休祿と賜りま。思ひ入る。小太師ガ義心ハ父ハ
 劣さる。勇氣固ハ顕れ。末のり。き少年士と。霎時あり
 とも身の休祿と。拿ま。遺憾と思へども。ま。止。止。止。
 氣色と察して。長則朝臣。小太師ハアさる。ハ。你ガ願。充。理。あり。

又五傳二編卷之一

又十郎が遺願もあまふ快く休祿と遣まへし。されど汝が母
袖篠八歳まゝと老ふ至らねども。女義あまふ逆旅中。緯ふ障り
もまうし人。要時国ふ止るべし。予懇慫ふ扶知まへし。此義
やうふと問ふべ。袖篠も小太郎も。親として子として。只二個
国と海山隔てへ互ふ案じ案らま。結句心も安うし。願ふ
へ母子共侶み出で行くべし。つべ長則朝臣も。其志の切
あると感じて。頭み赦し。母子へ夫より家み入り。父十郎
が灰骸と。哭々送る香花院へ。例のどく葬りくる。原來初七日
果し。頃国主長則朝臣より。路次の雜費ふあすべし。とて。金銀
數多賜りし。亦休祿の土器と下され有る。決と共侶ふ。それ

小休祿とは。入し家小使する。カニといふ奴隷も。召はし。馴
し古郷と跡ふあり。去向へ何那と定めあま。あまき涙の浮世
ごとと浮身みつり。思ひ出ま。父が遺言の名玉と。早くもたつ。の
相生の住の江の松千代みり。祈る高砂神垣や。馴ぬ逆旅と尋
ひ行。心の内をともあれあり。説間二頭分領。蛟倉紫雲二郎行
龍の嚮ふ異と戦ひし。那が乳の下より出る。名玉と拾
取り。幻術と以て一方と切抜。人かき所ふ遊のびつ。さく。那玉
と遂と見る。小真ふ希代の名玉あね。心の内大ふより。且
あやし。獨はる。思ふや。心得が。まへ。那女。勅使と成て
入筆し。玉と棄入為と見へし。然る。那が乳の下より。亦

又正傳二編

這一顆の玉出さる。這こ以て見る時ハ那女こそと天神山あり。紫蛇雄の靈魂が告ぐる。吾も因あり女あるべし。さうして
 ぞ果る。まみくし。因果自然の理可あるべし。然あは那
 ハ俺妹子の妻とあり。妙あるか。心も答て家路を
 入り。逆旅の衣裳と立派に出扮。身も白羽絹の上。錦の帯
 と締。朱鞘の朴刀脩釵横へつ。編笠と深く被冠。首も小ある衣
 帯袍とつけ。東の方へさざらんと。早頓逆旅の只独り。頃ハ文
 月上旬赤浦と跡あり。名もや。や。舞樂兒浦。一の谷とも打
 さる。平相国が都せし。福原近く着みる。登日も早中晡
 さうりふ成て大日晃々と。亞細亞の海に沈む。金鳥帆間。飛ぶ

りて。海面の夕景色見る眼もさ。長汀曲浦。遙く響く須廣寺
 の鐘もあ。と催さる。曙の傍ある茶店。小憩する。霎
 時勞と休。所へ年の頃二十外。二三も過ぬ。人と思し。女髪
 の結さ。帯の模様。身づり。拿姿。當流。み。粹といふ。好春
 風といふ。僕も。只獨り。紫絹の布帯袍と携へ。茶
 店の舟とのどろろ。最剛々。中。這里の主。六旬むらり
 の老婆あり。が。原來。歇客屋もあ。と見へ。酒者の小女あり。登
 皆老婆ハ那女。向ひ。和女。師ハ何。の。人。や。歳。向。た。れ。見。覺。非。好。
 何。へ。も。あ。れ。神。慧。あ。れ。と。い。ふ。所。へ。亦。西。の。方。より。して。年。々。頃
 十八九の弱。い。漕。子。逆。旅。翁。小。黄。銅。箍。の。一。拵。と。横。へ。一。名。の。角

加拿小荷と持せ。早急で這里へ來りしは暖簾のうげより那女
 を。右さま尤さまうち見とれ。霎時の立起も得去らば忽地茶
 店へ入來り。彼女が腰かけろ。一ッ床机に腰打かけ。老婆が酌
 一茶と啗内も。目尻ふ春の心と有ち。只彼女の方の見て。思
 ありがどく。醉るがどく。むろろり落と懐の皮の財布のいそど
 も知ろき。田金とん。早く推さる。彼女猛ふ姿と改めろ。云ぬむろり
 不目遣ひし。頻ふ情と寄ろぬどね。漢子の今どくまろり。う。ま
 と寄て。やよ文中。和主へ何那の人あし。又何那へ往行ろし。
 問バ女の顔打頼。吾濟へ即兵庫ろ。七の宮町に住。薰籠屋が娘
 組系と呼あすそのみ。赤石の浦ふ些の准緯あり。只一人之



這里までへ來りしは鈍や思ひぬ足を痛め。一足一里の思
 ひとあしぬ。あそを好友ありあし。這宵の這里に一宿と。つ
 ちふ存じ侍る。云と関より。彼漢子。その好緯の有るあうか
 吾濟も兵庫の者ろ。と檜垣屋船十郎が嫡漢子揖五郎と云
 者あり。今朝姫路より立出。兵庫へ去んと思へども。悲しや
 足痛頻り。誠一足千里のむ。和主這里に止歇るを
 あし。吾も共侶這里に歇店。やよ纜の各あり。汝の其荷物と
 持ち。先達てか。ま。這里より兵庫へ道のわ。三里の
 過へ。少くも暮晩更もあし。親父への平方の口梅。以
 て。よろしく云曲置べし。吾明日のあへる。早くとい

かゝ立まば。纜大ふ困。しりしり。よの迷惑か役目うかされど。主は
命あまを逆くして。反まがてうり。仰み従ひまらるべし。旅中の
用慎専一あるべし。御腰の東西と大切心得ありと。纜が靴とらぶ
さぬ名刀の念と押して。うらうら。初集ふあし。太平二が後妻七
増垣屋の
傳あり

第十二回 福原古都み楯五郎釘と失ふ

纜既ふりまれば。今心易し。とて。さく。椽がうらふ。うらうら。上を
ハ主の老婆ハ早くも心得先這方へと。奥と拂ひ茶あごと酌出つ
饗應首ふは。うらうら。紫宅二郎ハ首より。女の体と窺ふ。心へ
かゝる。あまの。主の老婆ふ。打向ひ我り。去向と速燥逆旅秋の口

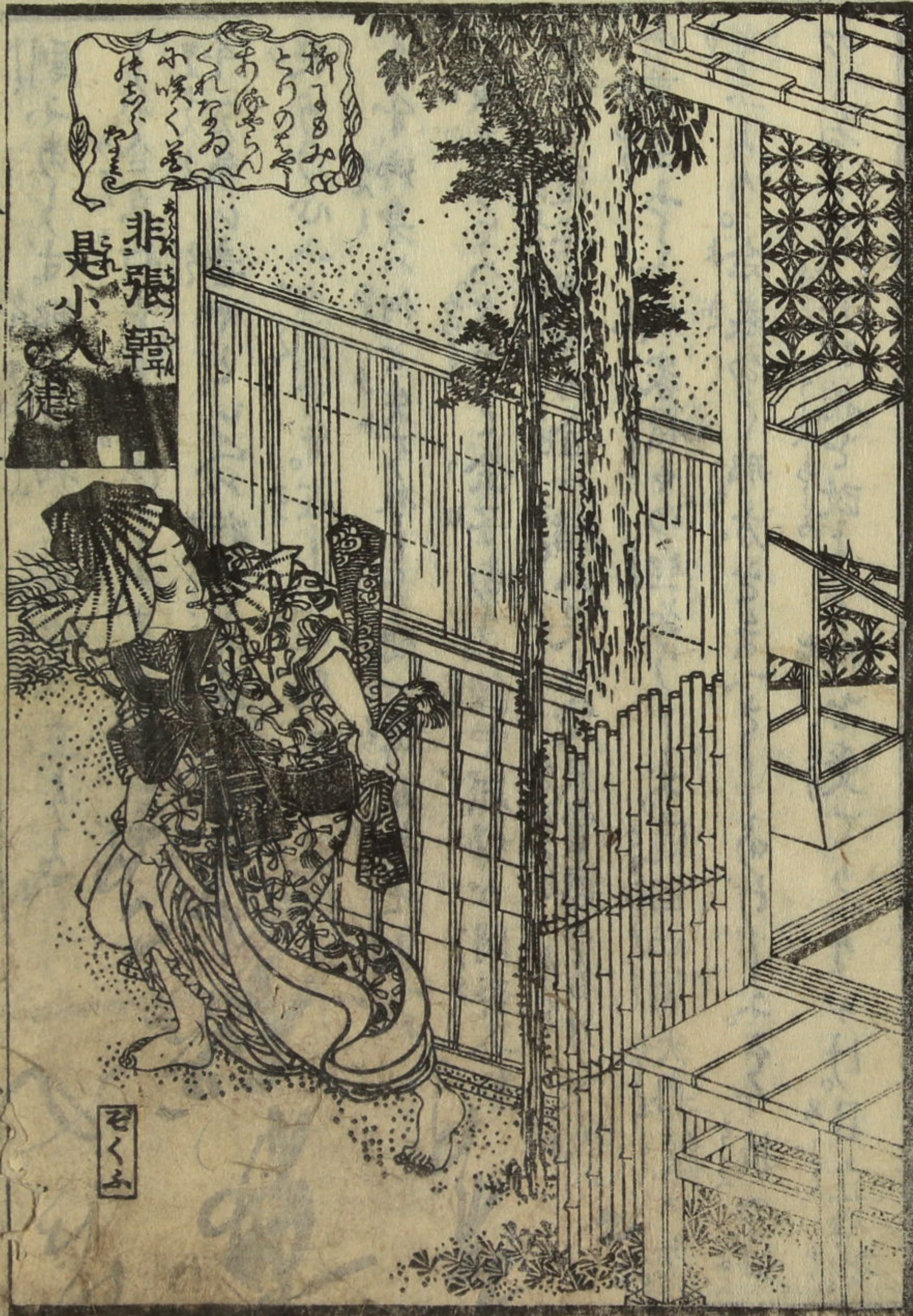
ハ晩ふ早し。今宵ハ歌店とゆるさる人やと。問へ主ハ打点頭一
個旅と歌客ざらん。元來呀の提あま。和君ハよりある。脚人ハ
見へ。氣遣し。うらうら。左や右云ふ。歌客ハ。彼
兩人ハ。間ハ別ふ。とて。うらうら。一。間隔
間と取り。楯五郎ハ。うらうら。組糸と手ふ入んや。彼
ふ付是ふ。只願袖牽腰とほり。云より。けみ挑ふ。と
組糸ハ。心の内善欬悪欬ハ。浪の白き膚と見さる。うらうら。
楯五郎ハ。うらうら。の。うらうら。主の老婆ハ
とて。の。敷と盡して。美酒佳肴。早拵盆と取ひらげ。人交
もせず。只二人。うらうら。つ。酌か。と。拵の敷。重と。組

糸ハ緯不寄。不得手あり。とてささふ。過ぎす。かゝる。い。な。ど。ふ
 揖五郎ハ十分酔て面赤頬紅。涎流して組糸ふ。あ。づ。れ。か。ら。ら。
 やよ糸舐袖より合もも縁。と。や。開方と這宵歌店。二
 世も三世も兩人が縁。深き所へ惚れひ。と。交合あれ。い。や。
 い。ハ。組糸顔赤らり。吾済のやうを患。もの。でも。さ。ゆ。い。思。ろ。く
 あり。と。い。う。い。空。く。他。う。や。思。ろ。心。庭。た。ふ。見。せ。ま。り。い。う。ふ。も
 従ひ。ま。ら。ん。と。い。つ。バ。揖五郎飛立思ひ。早心の内鐘と撞き。言。そ。く
 ら。ふ。震。出。し。開方。が。心。ま。る。あ。く。ら。あ。ど。ろ。心。中。見。せ。ざ。い。人。是。此
 金子ハ百両あり。大切。あ。ひ。物。あ。れ。ど。翌の朝。まで。和主。ふ。頭。人。是。だ
 心の真あり。翌。ふ。至。ら。ば。此。金子。と。よ。り。せん。遣。り。も。せん。先。懐。い

楚り。あ。さ。め。い。ぎ。床。入。と。促。せ。ば。組糸。心。中。大。ふ。う。ろ。く。い。揖五郎。が。手
 と。拿。り。て。床。ふ。入。り。や。帆。り。船。雨。と。あり。雲。と。あり。結。ぶ。い。夢。欲。夢
 の。間。と。鼻。息。と。共。眠。と。う。ろ。ろ。時。ふ。其。夜。も。更。肝。く。早。真。夜。中
 甲。と。あり。い。ろ。ろ。紫。宅。二。郎。ハ。次。の。間。あ。く。眠。ど。も。兩。人。が。閨。の。外
 へ。く。夜。拵。了。と。隔。亮。と。い。ふ。打。閉。る。合。点。の。行。ぬ。銜。妻。奴。要。こ
 と。あ。り。め。と。夜。着。團。の。外。より。聞。こ。も。さ。さ。さ。い。あ。く。い。と。組
 糸。や。お。ら。身。と。起。し。窺。ひ。見。せ。ば。揖五郎。ハ。甲。夜。の。酒。酔。と。闘。戦
 の。勞。子。や。あり。い。ん。手。と。突。出。し。枕。と。さ。ぐ。前。後。も。い。ろ。ろ。白
 川。夜。船。志。と。や。ら。ら。と。組糸。ハ。先。百。兩。の。黄。金。と。い。ふ。枕。傍
 不。置。く。ろ。ろ。脇。指。と。好。品。あ。く。い。ん。と。そ。つ。と。引。抜。行。燈。い。

すううつやゆら打うへー。とろくと見ろふ鉦の耳味。鉦より
 鏝のしきで。雌龍の形顯ま〜。云ぶも〜。雌竜の名
 乃。畏あか寒きありさぬふ。是か〜。組系ハ、鞘小収
 四方と見廻し。拔足〜。次の間へ出行所と紫宅二郎
 ひつくと起〜。組系ガ、裳と捉へ〜。動〜得む。大胆不敵此
 賊婦組系些〜。驢む身とろ〜。懐剣す〜と後放ち
 透と透〜。刺んとする〜。行竜ハ事〜。右ふ〜
 一會兒ハ戦ひ〜。女賊の勲尋常ありね
 一龍ふ〜。行竜も。朴刀と被放〜。三四合戦
 内ガ〜。行燈と誤て踏消〜。前後も知〜

鳥羽王の闇中あり。これ互ふち〜。油断せず。透〜
 よう〜。砍むすび思つ〜。も残千鳥の声の〜。浦〜
 突戦勇猛もろ〜。あ〜。透と窺ひ逃
 んとする女賊ガ上帯引掴〜。鏝も通ね〜。通す〜。誤
 て〜。の柱ふ〜。と突立〜。女賊ハ自ら帯砍放〜。跡と
 起〜。四下と見ろふ悲〜。や百兩の金子と雌龍の剣ハ
 揮五郎大ハ保〜。組系ハ何那〜。行〜。女ハ何那
 行〜。ヤと。狼狽廻〜。驚き周章て。狂氣の如く〜
 主の老婆も出來り。彼組系〜。女ハ吾濟〜。名



柳の影み
とりの影み
あはれなる
小嘆く
はな

非張
是小
徳

又五傳二編卷六十一

石く



かあ

かあ

又五傳二編卷六十一

石く

馴ふあらず。那今日初く這店へ立より。最訓々しく。合点行さむと思ひし。さて。さても賊あり有つるよ。笑止
千一カ氣の毒やと。ソバ行竜點頭て吾も胡亂と思ひし。甲
夜より心不由断せす。在り謂所みや。僥倖ふして東西と取
ます。御身の何と失われしと問は。揖五郎吐息つぎ。吾が紛失
の東西とて。名刀と金子あり。鈍や賊婦が圈套ふかり。奪取
し。這二百兩の金に惜み足らず。只當惑へ名刀。彼へ希代
の重宝あり。我家代々の宝ありし。這回西国大内候の所
望ふより。余義あり。那方さまへさしあげし。そが拵の好
かぬ。とて再び拵と改よと仰せ受て。くりがけ。目立ぬ様

不旅刀へ仕込し。賊難との。ぐま。人の謀ありし。斯味其々
敗れ。賊の手不取し。と。ぐまも親へ。悲しむ。悲しむ。悲しむ。
し。と。ぐま。と。悲しむ。嘆け。行竜も。心の丹始て驚き。扱は彼組
系奴へ。金子の。拿し。と思ひし。耳くも名刀と掠奪せし。
欵。吾僥倖ふ。雄龍の。釵あり。是と以て。揖五郎。不賣。十分あり
んと。思ひ。ふくれ。紫。二節。その迷惑の。絆。あり。ぬ。和立
か心配し。厭ふ。察とる。余ありあり。夫不附。這首。一ツ。妙説
話あり。甲夜賊婦が。拿逃せし。雄龍丸の。釵。や。今吾腰。一
刀あり。この。祖宗。よりの。付代。し。最大切。あり。ものあり。
雌龍丸と對さるべき。雄龍丸の。釵。あり。是と。知主。不賣。与へんと。思

ふか和主の量見の如何ありやと問うくまば、揖五郎の腰立直
し。その願うくも這上ふ。未めぐとき、徒侍あり。首言試う、其
劔と一見せんとする。寄バ、行竜の帯下、劔と。やゆ、執て指
出さふ。揖五郎ハ行燈の火と、燈明て遂と見らふ。拵、美々しく
して。白木の鞘、彫あり。さく、抜放てまうく。見らふ。明晃々
して。眼を遮り。冷々として、夏あや寒く。雄龍の形、鉞、小頭、
蛟龍、白空、小踊、がどく。雌、竜丸と、號バ、又上品の名劔あまは、揖五
郎、心中、よく、感、じ、り、り、や、と、よ、旅、の、お、侍、士、御、身、今、此、名、刀、と、賣
与へ、ま、う、く、バ、廣、大、無、量、の、慈、悲、心、あ、り。そ、も、く、價、の、つ、や、ど、あ、く、や
と。問バ、行、竜、額、と、撫、家、ふ、も、身、あ、も、易、く、と、き、重、宝、あ、ま、と。今、和

主が難義と、救人為あまは、價の元より論むる心か。されど雌竜
丸より、一等上の名劔あは、五千金、あ、賣、く、と、れ、と、云、バ、揖、五
郎、怖、り、せ、ま、う、と、思、案、と、定、め、五、千、金、の、價、有、や、無、や、
其、程、の、知、ま、ね、ど、も、今、指、當、つ、の、度、あ、ま、は、三、千、金、小、買、取、
さん。然、ま、ど、這、里、の、逆、旅、中、囊、中、元、より、准、備、あ、り。願、う、兵、庫
の、吾、濟、が、宅、ま、う、來、ら、せ、ま、う、早、速、小、金、子、と、調、ま、う、と、ま、
と、つ、つ、行、龍、点、頭、て、價、さ、人、定、く、ま、は、金、子、の、少、く、遅、ま、と、
て、元、來、急、ぐ、ぬ、逆、旅、あ、ま、は、這、義、あ、ひ、く、苦、く、あ、る、ま、う。夜、明
あ、バ、劔、と、携、へ、和、主、が、宅、ま、で、乘、る、と、我、の、原、西、播、の、産、あ、く。生
垣、貢、と、喚、做、ま、の、故、有、で、浪、々、。關、東、へ、趣、く、砂、不、計、今、夜、の

又玉尊二篇卷之一

一宿子焦る珍敷ふ出合しも。亦後々の禁警あれ。まゝくうら弱き
 某かまじい慎むらんべあささるべき。と尚と余説と尺子内子雞鳴
 曉と告く早夜も明くくうらまじい。揖五郎の夢のしく。身は空
 蟬のいもぬけし。うらうらとて歇店と立出兵庫とさ
 て入り行畢竟のうら譚ある二之卷十三回と見て知べし

文久三年七月迄迄看

権五郎

二橋

坂本

近世新話 雲晴間雙玉傳二輯卷之一

丁巳の夏

夏はあつた

あつた

あつた

坂本

坂本

